



TITLE:

[12月25日 総括] 質疑応答

AUTHOR(S):

山本, 博之; 原, 正一郎; デディ ワフユダン; 西, 芳実;
ムナスリ; デディ ワフユダン

CITATION:

山本, 博之 ...[et al]. [12月25日 総括] 質疑応答. CIAS discussion paper No.25 : 災害遺産と創造的復興 : 地域情報学の知見を活用して 2012, 25: 181-182

ISSUE DATE:

2012-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/228467>

RIGHT:

© Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University

質疑応答

山本博之 今日の会場にはアチェの小中学校の先生方がおられるので、学校の先生方が災害にどう臨むかという観点から原先生におうかがいします。

それぞれの学校では日々の授業や課題活動、そしてときどき行われるイベントなど、さまざまな活動をしていると思います。それらの活動を先生方が記録に残していると思いますが、記録するときに、形態や内容など、どのようなことに注意して記録しておくか、災害対応やそれ以外の問題に備えるために役に立つのか、情報の管理の方法についてアイデアがあれば教えてください。

■ 活動記録には、目的、議論内容などプロセスを残しておくことが肝要

原正一郎 難しい質問だと思います。たとえば日本では、災害の歌をつくって歌わせたとか、急いで高いところに登るよう教育していたという例が報告されていますが、すべての学校で同じ教育をしていたわけではないし、成功したところもあれば失敗したところもあったと思います。

ですから、成功したことをビデオに撮って記録したとしても、私はあまり役にたたないと思います。もち

ろんないよりはいいと思います。しかしそれよりもむしろ、それぞれの活動をしてある結果になったときに、どのような目的で、どのような議論をして、どのようなかたちで実行したかというプロセスを残すことが大事ではないかと思います。

何が言いたいかというと、たぶん開発援助と同じではないかということです。たとえば日本で成功した事例をそのまま海外にもってきても失敗することが多い。なぜかという、土台が違うのに上だけ持ってくるからだと思います。同じ意味で、「〇〇で歌を歌って子どもが逃げた」といっても、山に近かったから山に登っただけであって、海辺だったら逃げ場はない。やれることは地域によって違うと思います。

ですから、成功事例は大事ですが、それを自分たちがどのように活用していくかについて検討する前に、地域の特性や利用できるものを知る必要があります。その際に、教師だけではなくて専門家や親や地域の人々の参加は欠かせません。

まとめると、活動を記録に残すのであれば、どのような人たちが参加し、どのような議論を展開し、どのような結果を得て、どんな行動を取ったかということ貯めておくことが大事だと思います。もちろんその過程でビデオがあればもちろんよいわけですが、それより私は、そのプロセスを文字として記録しておくほうが大事ではないと考えます。

■ 日本の地震予知はどこまで進んでいるのか

デディ・ワフユダン(気象気候地球物理庁(BMKG) バンダアチェ支局) 日本の技術革新によって地震の発生はどこまで予知できるようになったのですか。本当に



ワークショップ最終日は多くの小中学校教員が参加。教育の現場の関心にもとづく質問がされた

予知できるようになったのでしょうか。

西芳実 地震予知にはいくつかの段階があります。「この30年のあいだに起こりうる」という予測はできるようになりましたが、何月何日何時にどれくらいの大きさで起こるということを正確に予知することはできません。これは、現在のどんなに高度な技術を用いてもできません。だからこそ事前の準備が求められます。

ムナスリ 最近インターネット上で「〇月〇日ごろ地震が起こる」という話がありましたが、起こりませんでしたね。地震がいつ起こるかは現在の技術では予測できないのです。

■ 秩序だって行動する日本人の行動様式はいかに培われたのか

デディ・ワフユダン 秩序だって行動する日本の文化はどのようにして可能になったのですか。

原 日本人は秩序だった行動をすると言われましたが、日本人から見ていると、そんなに秩序だったいた

とは思えません。私は文化人類学者ではないので正しい言い方はできませんが、あえていえば、農耕主体の地域であったために作業や祭事に関わる集団行動があったり、第二次世界大戦中の隣組などの記憶が残っていたりするのかもしれません。申しわけありません、専門ではないので答えることが難しいです。

■ 「地域の知」を人びとが使えるように翻訳する部分で関わるのが地域研究

ヘンドラ 原先生のお話にたいへん感銘を受けました。私たちがアチェの「地域の知」、災害対応に関するアチェの知恵を集めています。日本の地域研究は、災害対応に関する日本の「地域の知」やアチェの「地域の知」を集めることに関心をお持ちでしょうか。

西 大事なことは、さまざまな地域の経験を集めることだけではなく、それらを人びとが使えるように翻訳するところです。どのように翻訳すればほかの地域の人びとにも伝わるかという部分を考えているのが地域研究だと言えます。